

1991-11

昔は、洋書（種本）さえ持つていけば、学者らしい顔ができたらしい。でも今は、そんなもの誰でも手に入る。コピーもできる。そんなことくらいじゃ、誰も驚かなくなった。いまの若い学生さんたちは、ポップな感覚が身につけていて、昔と様子が違う。ファッションや情報にも敏感です。でも、トレンドだとか、進んできるとか言われるものに、まだ弱い。読者のコンプレックスを刺戟して、本

を読ませる構造は変わらないみたいだ。この傾向は、誰かがよい考えを思いついたので、みんなが共有しようという自然な知の共同性と、違います。読者も書き手も、その時々話題を追いかけるだけで、情報に関わる持続性も、機動性も、体系性もない。そうやって書き散らされた本を集めてみても仕方がないな、と本棚を眺めてがっかりします。（はしづめ だいさぶろう・社会学）

102

## 時が過ぎて読むに耐えなくなる本

橋爪大三郎

日本のように公共図書館の不備な国で、きちんとした知的な仕事をしようとする、もう大変です。自宅を図書館みたいにしなさいけなくなるから。

本を買わないと読まないの、読むつもりで買っているからです。実際はなかなか読めないけれど、持っていることがとりあえず大切だ。それに、読んだ本には書き込みがしてあるから、これはもうどうしても売れない。

書き込みは、学生時代からの癖でして、あの時気がついたので。本を読んでいて眠くなるのは、受け身だから。だったらこちらからも、アクティヴに反応すればいい。こんなアホなことを書くな！ とか、何でもいいから、思ったことを書き込んでいく。そのほうが、頭に入るんです。

私は雑誌の傾向があって、社会学（専門）の本は差し置いて、それ以外のものばかり読んできました。マルクス主義から始まって、吉本隆明さんのものとか、構造主義のレヴィ・ストロースとか、ヴィトゲンシュタインとか。それから、人類学、経済学、数学、……と勉強して、それぞれ本棚一連ずつくらい本があります。

当然、置き場所に困って、初めは前後二重に置いたけれども、すぐに満杯。そこで廃材で、天井までの本棚をいくつも作りました。そしてジャンル別に、ここは哲学、ここは仏教、という具合に本を配架した。横に並べると、総延長二百メートルくらいになるかもしれない。それを、実家と事務所と大学の三箇所に分散しています。

大学院を出てから十年以上フリーだったの

で、図書館も使いにくいし、いきおい本を買わざるをえなかった。それも、新刊のうちに買っておかないと、日本の出版事情ではすぐ手に入らなくなってしまう。ますます本が増えます。

本を読んで、ものを書く。これは情報戦です。その基礎になる、情報の収集・整理には、持続性、機動性、体系性の三つが要求される。これが図書館の中核機能なんです。

ところが、日本の大学や図書館は、この点の自覚が甘いうえ、利用も制限している。図書館が信頼できれば、われわれ個人が余計な本を買うことないんだけど、そうもいかなから悪戦苦闘しています。

でも、個人のやることには限度がある。私も、蔵書に一枚ずつ図書カードを作ったり、組織的な整理を心がけているけれど、とても追いつかない。それに、どんなにうまく管理しても、私が死ねば蔵書は解体、今までの努力は水泡に帰してしまわうわけです。

私が大学に入ったのは一九六七年、東大闘争の直前でした。入ってみると、クラスに読書会なんかあって、みんなけっこう本を読んでいる。最近聞いたところでは、その頃簡

単に手に入った現代思潮社の本とか反スターリン主義関係のものなんかが、もう探せないんだそうです。

当時、本というものに抱いていたイメージは悪かった。大学や付属図書館にある本は、古いばかりで、時代の突きつける課題に答えられないと思えたんです。なにか膨大な蓄積があり、それにもとづく研究も行なわれているみたいけど、むしろ、われわれを抑圧するものの元凶みたいに思えた。それを利用してやろうという気持ちにならなかった。

やがて全学封鎖が始まり、私もデモの尻尾にくっついて、本郷に行っただけです。法学研究室には丸山眞男先生がおられて、「ナチスもやらなかった暴挙だ」と学生を非難した。学生は「何を言うか、お前ら知識人がだらしないから世の中が悪くなった」と、丸山さんを追い出して、研究室を封鎖してしまっただ。そのあと機動隊が入って、水がかかったりして、貴重な書籍や研究資料がだいぶダメになったみたいです。申し訳ないことだったけれど、住宅事情が許して、先生がたが立派な書齋を持っておられれば、もっと被害が少なくてすんだかもしれない。

昔の大学には、象牙の塔というイメージが色濃くありました。知識を独占していて、あらゆる問題に発言権を持つ専門家が揃っていると思われていた。知識人は偉くて、その知識を少しづつ民衆に分け与えていく。そんなスタイルで、大部分の本が書かれていたように思う。体制／反体制を問わず、そうだったと思うんです。

それで、やたら難しく解りにくい本が多かった。そういう本を書いている教授が、現実の問題にちゃんと対応できたかというところではなくて、学生の追及にもまともに応じられない。全共闘の学生もいま思えばピンぼけだったけれど、教授先生がたは信用できないな、とそのとき思った。

なぜ信用できないと思ったかと言うと、知識の出所が曖昧だし、どこまでが自分の判断、自分の責任なのかもはっきりしなかったから。外国からの借りものにはすぎないのに、それをほっかむりして、言葉だけの知識をやり取りする。引用だらけで、言葉が本人の血肉となっていない。それくらい、学生にも見抜ける。未消化な思考をはったりで誤魔化しているだけ。そこは学生も同じだったけど。

わたためためでしょう。本には、その時代の雰囲気がかびりついているもので、それを共有すると雰囲気を読んでしまおう。論理や構成が適当でも、言いたいことに共鳴してしまおう。一種のアジテーションで、読者と書き手が時代の雰囲気共有するから、本として成り立つのです。

しかし、時間を置いて読んでみると、そういう本は読めなくなるし、残らないのです。当時の本も、きちんとした反スターリン主義の論証ではなく、誰が誰を裏切ったかという責任のなすりあい、決して今日の回顧に耐えるようなものでない。

勝俣鎮夫さんの『一揆』（岩波新書）を読んだときもショックを受けました。十年くらい前に出たものですが、天台宗、比叡山の僧兵が一揆を結んで、京の町中に繰り出していく様子が書いてある。その儀式の次第が、なんと、全共闘とそっくりではないか。まず全学集会みたいなもの（満寺集会）が開かれて、覆面にゲバ棒の学生が集まる。だいたい学長（法主）人事などでもめるのですが、アジ演説が終わると、隊列を組んで市街に繰り出す。そして、機動隊（検非違使）と衝突す

日本の学者の場合、論文に、論拠の出典を明示する習慣が厳格でない。注のつけ方もいい加減だ。大学院になって、専門のものを読んでみると、そういう厳格さの欠如が、日本人によくある知的な混乱やまやかしの原因になっているように思えた。だから不必要に解りにくい本が多いのではないかと。こんなことも知らないのかと、聞き手のコンプレックスをくすぐって読ませるタイプの本はもう沢山だなあ、としみじみ思った。

注とか出典の明示といった、文献的な技術の歴史をたどってみると、宗教的背景が明らかになります。テキストは神聖で權威を持っている、という考えが根底にある。キリスト教やイスラム教のような啓典宗教では、テキストは神がつくったものだから、絶対であり神聖だと考える。それに対して、人間の解釈はいい加減だから、厳しくチェックする必要がある。人間は必ず誤謬を犯すからです。それを排除しようとして、真理を追究する方法論が確立した。そこに人間関係が入りこむ余地はないのです。

日本人の生活と思考のパターンは、これと違って、何ごととも人間関係の力学、つまり取る、という筋書きです。大学にも日本史の先生はいっぱいいたわけだから、お前らのやっていることは、僧兵と同じで千年一日、なにかマルクス主義だと、どうして言ってくれなかったのか。

人間、過去を学ばないと過去を繰り返す。だから、過去、つまり書物はきちんと管理しないとイケない。そう痛感しました。若者は感受性が鋭くて、時代にいち早く反応するものです。でも、ナイーブなぶん、無意識に因習なり伝統なりを残している。そこを切開するのも、学問の役割でしょう。

そして、学問たるもの、すべてを徹底して疑ってかからないといけません。けれども、それは、ニヒリズムや相対主義、懐疑論とは違う。方法に対する信頼、共有するテキストへの信頼がなければ、学問的な懐疑は成り立たない。だからそこが、出発点になります。では、なにが信頼すべきテキストなのか。それを見つければ、いざれ判ってくる。読み方を間違えなければ、いざれ判ってくる。どんな本でも、何かほかの本を前提しているものです。それをたどっていくと、原典につき当たる。だから本には、これは横

引きや妥協で決まると考える。それじゃ責任ある思想は生まれません。文献的な技術で、誰がテキストに責任を持っているのか、はっきりさせざるを得ない。

人間の発想には、いくつか基本的なパターンがあるのではないかと。たいがいの本は、そのパターンに従って書かれている。パターンの似ている本を、いくら読んでも無駄です。そんな暇に、そのパターンのおおもとになつた本（古典）を読んだらいい。するとヨーロッパのものは、かなり『聖書』に収まってしまうだろう。『仏典』や『古事記』も、そこからどういった思想が生まれたか、あるいは生まれるものなのかを考えて読めば、実に豊かな世界が広がってくるはずだ。

若い頃読んだ本を読み返すということは滅多にないのですが、たまたま新左翼の人の書いた『日本共産党史』という題の本を読み返す機会がありました。率直に言って、読めたものではない。最初に読んだときは、それなりの発見があったのですが、今読み返すと文体といい内容といい、読むに耐えない代物である。この二十一年で自分が変わったせいもあるでしょうけど、それ以上に、時代が変

網、これは大関、……といった格があって、思考の原型を示してくれている。あとの本は、そのパターンをなぞっているだけ。古典の名に値するものは、そう何冊もない。それさえあれば、あとの本は要らない、とも言える。

いまの時代は情報が多過ぎて、いろんなメディアを通して大量の情報が入ってくる。放送局が沢山あるようなもので、全部にアンテナを伸ばしていると、ホワイトノイズ（テレビのチラチラ画面）になってしまおう。思い切った情報をカットすることが必要だ。基本になる情報のあいだの矛盾をみつけ、それにこだわるのも方法だろう。そこから、つぎの時代を動かす原理が見つかるかもしれない。

ものを書くとき、ひとは感覚遮断の状態に入るものです。創造とは、無から有を作り出す作業。情報を外に求めるのでなく、自分のなかにアンテナを伸ばして、情報源を探し当てていく。何を読んだか忘れたところに、本は役に立ち始めるのだ、と実感しています。

学生時代、本に反感を持ったのは、知識の独占が権力に転化するのには許せない、と思っただけです。でもコピー機の普及や情報の洪水が、あっさりこれを打ち破った。